

ルーブリックを用いた実習評価の課題と可能性

寶 來 敬 章

キャリア研究センター紀要・年報 第8号 抜刷

高田短期大学

令和4年3月

ルーブリックを用いた実習評価の課題と可能性

寶來 敬章

高田短期大学子ども学科

1. はじめに

本研究の目的は、介護実習でのルーブリックを用いた評価に関して、学生や施設評価者の認識等のデータを用いて、その課題と可能性を検討することを主な目的としている。

そもそも、高等教育におけるルーブリックを用いたパフォーマンス評価は、近年積極的に導入されている。2012年の文部科学省中教審答申である「新たな未来を築きための大学教育の質的転換に向けて」や同答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」等で大きく議論されているように、大学教育の質的向上の必要性が主張されるようになり（中央教育審議会、2012、2018）、大学教育の効果や成果についても多様な視点で捉えることが必要となってきた。これら大学教育の効果や成果は単位認定という形で学生には周知されることとなるが、その評価の妥当性や根拠などが学生にとって曖昧であることは、大きな改善は見られなかった。そして、これらの課題に対応するものとして、ルーブリックを用いた評価が着目されるようになった。

ルーブリックとは「ある課題について出来るようになってもらいたい特定の事項を配置するツール」とされ、「ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもの（Stevens、2013=佐藤、2014、p. 2）であるとされている。ルーブリックを用いて評価をすることは、各教科において求められる基準に関して、「教員が何をどの程度教えたのか」という視点ではなく、「学生が何をどの程度達成（理解）しているのか」という視点から評価し、その評価の根拠を可視化できるという強みを持っている。そのような特徴があるルーブリックでの評価では、成績評価に関する公平性や客観性が高まることが期待できる。そして学習者はある時点での自分の達成度や課題を認識できるだけでなく、今後どのような部分を伸長（改善）すればよいのかということが確認できる。また、指導者は当該学習者に対して今後どのような部分を指導すればよいのか（どのような部分を改善・向上してほしいのか）という、授業や指導のあり方についても検討できるという点において、極めて有効であると考えられている。

高等教育におけるルーブリックを用いた評価については、多様な分野で導入され実践されてきている。藤浦（2021）は初年次教育の中のレポート・ライティングの際の新旧ルーブリックの検討から、ルーブリック活用の可能性について検討している。また、大森他（2021）は英語でのプレゼンテーションに関するルーブリック評価を導入することで、学習者の不安が低減したことなど明らかにしている。また、上記のような科目だけでなく実習科目でのルーブリック評価の導入についても研究蓄積は少なからずある。柘崎他（2018）や三木（2018）、宮本他（2017）、岡山他（2014）などの研究では、作成したルーブ

リックを用いた評価や実習指導者と共にルーブリックの検討を試みている。そのなかでも宮本他(2017)は、学習段階における介護実習でのルーブリック評価という点においては、本研究とも類似性が高い。この研究では主に実習生が不安だと感じる傾向が高い「実習記録(日々の記録)」に着目して検討している。ルーブリックの評価の観点・尺度の修正等を繰り返しながら、他者に伝わりやすい文章表現や記録として含むべき内容、望ましい体裁等をルーブリックに明示している。このルーブリックの作成と検討を通して、学生と教員が共有し今後の指導や学習の可能性、ひいては異なる学年での実習への活用も大きく期待できるものであると考えられる。

また、松本他(2021)の研究も研究の内容と類似点が多い。松本らの研究では施設実習を終了した学生の「振り返りシート」の「実習で学んだこと」という自由記述のデータをテキストマイニングという手法で分析し、学びの構成要素や施設種別ごとの特徴語を抽出した上で、保育実習Ⅰ(施設)の到達目標を枠組みとしてコーディングを行い目標ごとの出現頻度を求めている。学びの構成要素としては①子どもの養育環境、②両者や子どもの異なる特性への理解と配慮等、合計8つの項目が明らかとなっている。加えて施設種別ごとの特徴語としては、障害者支援施設等や児童養護施設、乳児院では「施設内の利用者や子どもの観察や実際の関り」が言及され、母子生活支援施設では「施設外の資源や利用者の背景」が特徴となっている。これらの研究は、実習という学外の学びや経験の評価について、ルーブリックを用いて調査研究しているという点だけでなく、ルーブリックを用いて実習前後や日々の指導への活用可能性を議論している点等きわめて示唆に富むものである。

これまで、筆者も所属している本学の高等教育研究会(以下、本研究会と記述)において数年間にわたって介護実習でのルーブリックを用いた評価の導入と実践を行ってきた。筆者を含む本学の4名の教員で構成される本学高等教育研究会の活動は2016年度に開始し、介護実習における評価の曖昧性や妥当性が議論される中でルーブリックの作成と実習評価への導入・適用等が議論された。以前から活用されていた県内共通の評価表及び評価基準等の問題点を議論し、学生の自己評価やその妥当性、施設での評価方法や内容の改善等を進めてきた。しかしながら、実習そのもの(施設種別など)や学生の属性などが多様化するようになり、新たな検討課題も散見できた。そこで本研究では、これまでの数年間で実施してきたルーブリックを用いた評価について再検討することと、今後の養成校及び施設での指導における可能性について検討する。

2. 研究方法

先述の通り、本学の高等教育研究会の研究活動の一環で、介護実習での評価にルーブリックを用いた評価の導入を進めてきた。2016年度に原案を作成した後に実際に本学の実習生を受け入れている施設担当者に関き取りを行って加筆・修正を継続的に行ってきた。具体的には、観察可能な基準や指標、各項目の数や表現等、可能な限り現場の意見を取り入れながら作成を進め、実習評価に試行的にルーブリックを導入し、再度加筆・修正を繰り返すことで、ルーブリックの改善に努めてきており、理想としては「学内での事前指導—実習経験と評価—事後指導と学生自身の自己課題の明確化」といった一連の流れが有機的に関連するよう、以下のモデル(図1)を構築した。

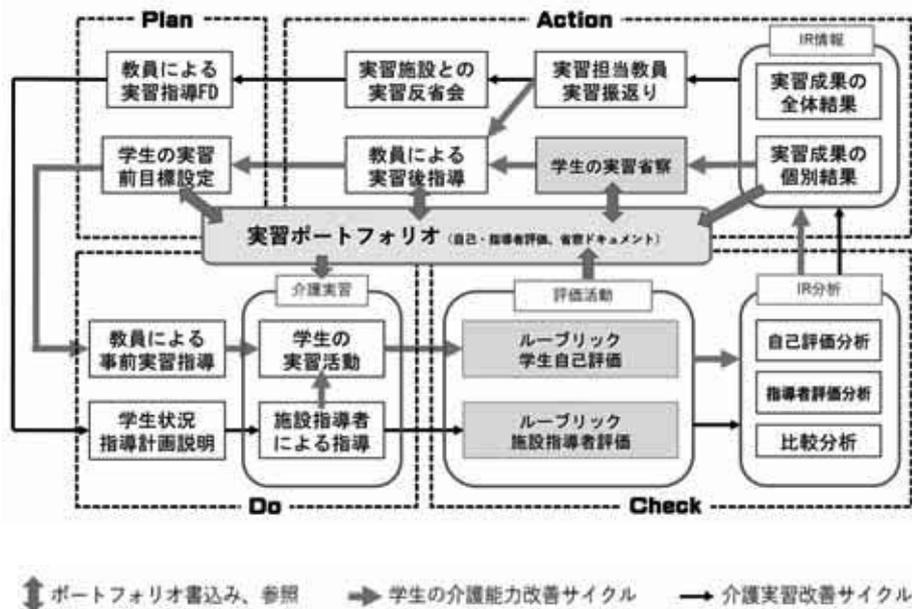


図1 ルーブリックを用いた介護実習の評価活動のPDCA サイクル

本稿では紙面の都合上、作成したルーブリック改定の経緯全てを提示することは困難であるが、最初のルーブリックが2017年2月に作成されてから、2021年2月までの間で7回の改訂を行い、現在では5つの領域、16の項目、26の着眼点、79の評価指標となった。以下に2021年2月に作成されたルーブリックの一部を提示する。

評価領域	評価項目	評価着眼点	評価指標(目標)	1点 できない しようとしていない	3点 努力中 しようとしている	5点 実習の目標 できる、ほぼ達成	実習Ⅰ	実習Ⅱ	コメント欄	介護福祉士の姿
介護活動	利用者の生活が理解できる	利用者の日中の活動を理解する	利用者の日中の活動を理解し、活動状況に合わせ関わっている	利用者の日中の活動を理解しておらず知らずともしない	利用者の日中の活動を理解しようとしている	利用者の日中の活動を理解している	—	—		利用者の日中の活動を理解し、活動状況に合わせ関わっている
		利用者の1日の生活を理解する	利用者の1日の生活を理解し、生活状況に合わせ関わっている	利用者の1日の生活を理解しておらず知らずともしない	利用者の1日の生活を理解しようとしている	利用者の1日の生活を理解している	—	—		利用者の1日の生活を理解し、生活状況に合わせ関わっている
		利用者の年齢、性別、障害の種類・程度などから利用者の特徴を理解している	利用者の年齢、性別、障害の種類・程度などから利用者の特徴を十分理解している	利用者の年齢、性別、障害の種類・程度などから利用者の特徴を理解しようとしていない	利用者の年齢、性別、障害の種類・程度などから利用者の特徴を理解しようとしている	利用者の年齢、性別、障害の種類・程度などから利用者の特徴を理解している	—	—		利用者の年齢、性別、障害の種類・程度などから利用者の特徴を十分理解している
		受け持ち利用者の生活歴や家族状況、人間関係などを理解できる	受け持ち利用者の生活歴や家族状況、人間関係などを十分理解している	受け持ち利用者の生活歴や家族状況、人間関係などを理解しようとしていない	受け持ち利用者の生活歴や家族状況、人間関係などを理解しようとしている	受け持ち利用者の生活歴や家族状況、人間関係などを理解できる	—	—		受け持ち利用者の生活歴や家族状況、人間関係などを十分理解している
		利用者のADL日常生活動作1など生活能力や作業能力を理解している	利用者のADL日常生活動作1など生活能力や作業能力を十分理解している	利用者のADL日常生活動作1など生活能力や作業能力を理解しようとしていない	利用者のADL日常生活動作1など生活能力や作業能力を理解しようとしている	利用者のADL日常生活動作1など生活能力や作業能力を理解している	—	—		利用者のADL日常生活動作1など生活能力や作業能力を十分理解している
	利用者の基本的な介護ニーズを知ることができる	受け持ち利用者の1日の生活を把握している	受け持ち利用者の1日の生活を十分把握している	受け持ち利用者の1日の生活を把握しようとしていない	受け持ち利用者の1日の生活を把握しようとしている	受け持ち利用者の1日の生活を把握している	—	—		受け持ち利用者の1日の生活を十分把握している
		利用者の障害や疾病を把握して、利用者の望みが理解できる	利用者の障害や疾病を把握して、利用者の望みを理解して関わっている	利用者の障害や疾病を把握できず、利用者の望みを理解しようとしていない	利用者の障害や疾病を把握し、利用者の望みを理解しようとしている	利用者の障害や疾病を把握して、利用者の望みが理解できる	—	—		利用者の障害や疾病を把握して、利用者の望みを理解して関わっている
		利用者がどのような気持ちで生活しているかを理解した上で関わっている	利用者がどのような気持ちで生活しているかを理解し、よりよい関係づくりを行っている	利用者がどのような気持ちで生活しているかを理解しようとしていない	利用者がどのような気持ちで生活しているかを理解しようとしている	利用者がどのような気持ちで生活しているかを理解して関わろうとしている	—	—		利用者がどのような気持ちで生活しているかを理解した上で関わっている
		受け持ち利用者の人間関係を把握している	受け持ち利用者の人間関係を把握し、よりよい関係づくりを行っている	受け持ち利用者の人間関係を把握しておらず知らずともしない	受け持ち利用者の人間関係を把握しようとしている	受け持ち利用者の人間関係を把握している	—	—		受け持ち利用者の人間関係を把握し、よりよい関係づくりを行っている
		受け持ち利用者の生活者として、身体的								

図2 2021年度版 介護実習ルーブリック (抜粋)

図1にあるように、各評点は1点、3点、5点となっており、介護実習が1からⅢへと進んでいく中で

評価対象となる項目が増える。評点はもともと1～5点までの5件であったが、評点の境界が曖昧であることが継続的な課題となっていたため、ルーブリック上の評点としては1, 3, 5点とした。ただ、評価をする上では2点や4点が妥当である場合も考えられるので、以下のようなガイドラインを付記した上で、実習担当者には評点をつけてもらった。

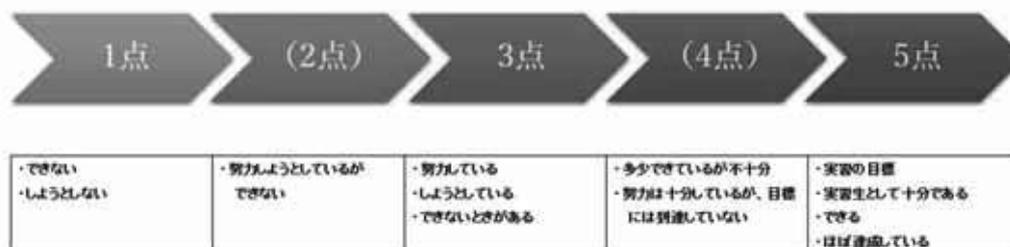


図3 評点に関するガイドライン

このルーブリックを実習生、施設の担当者、そして養成校の教員が共有することで、それぞれの実習で「どのような観点について」、「どのような姿やパフォーマンスが求められているのか」という点が明確になっている。また、介護実習に行く学生は日本人だけでなく、留学生も含まれる。留学生に対するルーブリックは同様の形式であるが、全ての漢字にルビが付せられている仕様となっている。ルーブリックの右端にある「介護福祉士の姿」という項目は、卒業後に介護福祉士として働く際に望ましい資質や能力、技術など将来の展望を提示するという意味で記述することとした。現在では、このルーブリックを用いて介護実習ⅠからⅢまですべての実習で正規の実習評価票として活用している。本研究ではルーブリックを用いた評価について2019年度入学生の介護実習Ⅲの自己評価と施設の担当者の評価のデータを比較検討することで、その有用性や限界を議論する。

3. 評価データの分析

(1) 学生と施設担当者の自己評価

2019年度入学生は日本人学生10名、留学生（ネパールやスリランカ）17名であり、ほぼ現状のルーブリック（評価指標は全81項目）と相違ないものをすべての実習で正規の評価として採用された学年である。最初の介護実習Ⅰから介護実習Ⅲまでの学生の自己評価と施設担当者（施設指導者）の評価の推移は右の図4の通りである。

日本人学生の自己評価は3回の実習を通してさほど高くなく、それは施設担当者の評価とも類似した傾向がある。特に実習Ⅱでの落ち込みは介護実習Ⅰの事後指導及び実習Ⅱの事前指導の改善が必要な可能性は高い。一方留学生は実習Ⅰから実習Ⅱへの増加が顕著であるだけでなく、施設担当者

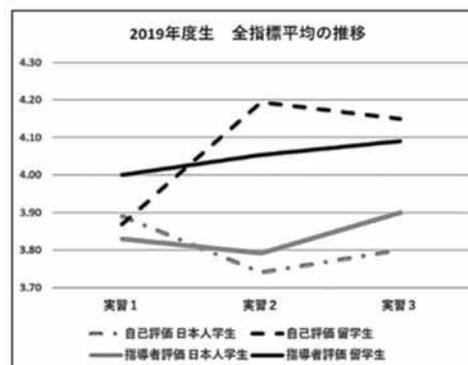


図4 2019年度生 介護実習Ⅰ～Ⅲまでの学生・施設指導者評価

の評価も概ね良好である。ただ、「留学生」というバイアスがかかっている可能性も低くなく、実際に担当者の認識として「言葉が通じないことや漢字の間違いなどがあっても、一生懸命やっている」ということで全体的な評価が吊り上げられるということは考えられる。

(2) 施設担当者による各評価領域の評価

全指標の平均と同様、各領域、各評価項目、各評価の着眼点、各評価指標の値は下記の図5～図7となる。活用しているルーブリックは「実習態度」「自己目標」「コミュニケーション」「介護活動」「施設理解」の5つの領域を設定し、図5は日本人学生の領域ごとの平均である。

実習Ⅲにいくほど上昇することが望ましいものの、該当するのは「コミュニケーション」のみとなっており、実習に臨む姿勢や積極性などを含む「実習態度」は課題であると考えられる。

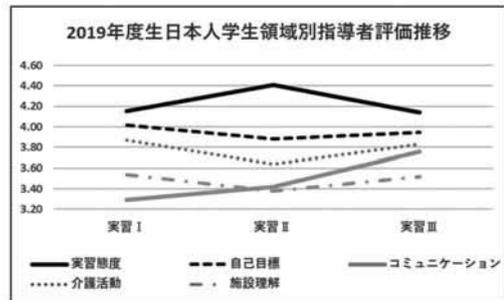


図5 領域ごとの指標の平均

次に全指標 81 項目の日本人学生の平均から、日本人評価と施設担当者評価の整合性については図6に示す。

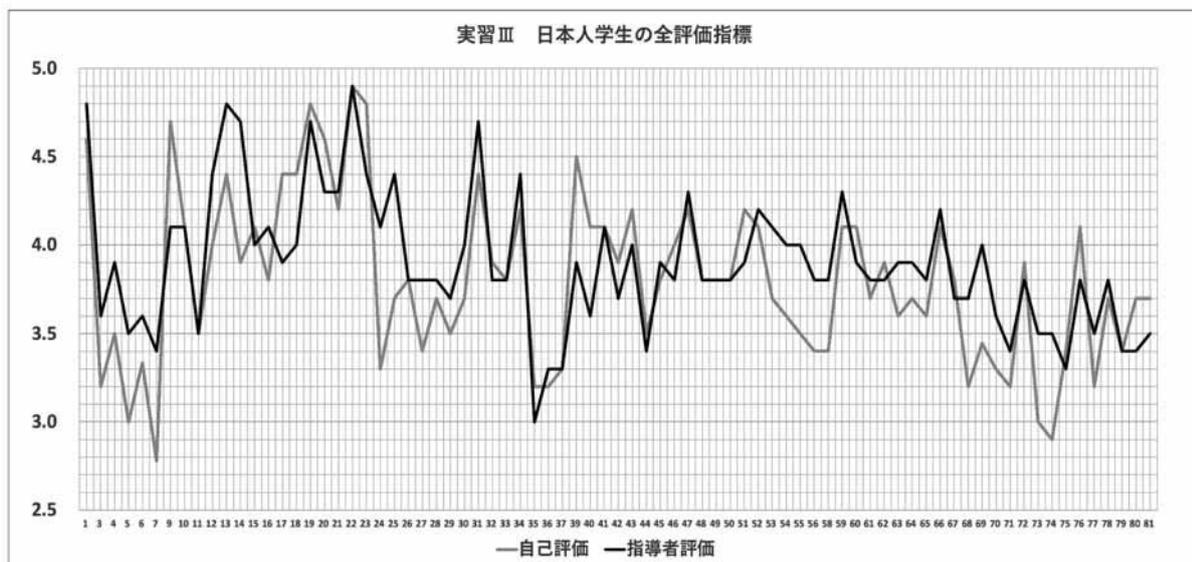


図6 全指標の平均

各項目を見ると、学生の自己評価として高いものは項目1、9、19、22であり、低い項目は、3、5、7、35、36、37、74である。一方、施設担当者の評価として高いものは1、13、19、22、31などであり、低い項目は35、36、37などが挙げられる。各項目の内容は以下の通りである。

表1 学生及び施設担当者の高い評価

学生評価 高い	内容	施設担当者評価 高い	内容
1	利用者・職員の名前を覚える	1	利用者・職員の名前を覚える
9	他者が傷つかない関わり	13	実習記録等の管理
19	体調管理	19	体調管理
22	目標に向かって実践している	22	目標に向かって実践している
		31	重度利用者とコミュニケーションをとろうとしている

表2 学生及び施設担当者の低い評価

学生評価 低い	内容	施設担当者評価 低い	内容
3	学習課題への気づき	35	利用者の一日の生活を理解
5	利用者からの情報収集	36	利用者の特徴を理解
7	丁寧な言葉遣い	37	受け持ち利用者の理解
35	利用者の一日の生活を理解		
36	利用者の特徴を理解		
37	受け持ち利用者の理解		
74	他の職種の理解		

高い項目として、実習生として施設の方の名前を覚えることや体調管理、学生なりに努力していることなどは、学生自身も施設担当者も同様に良好に評価している。3回ある介護実習それぞれで目標が異なり、実習Ⅲではこれまでの実習経験や学び、自己課題など見出しながら取り組むことが求められ、学生なりに意識しながら取り組んでいるものと思われる。

一方、低い項目としては主に利用者との関係性によるものが多い。もちろん、高齢であることや障害や要介護の程度によってコミュニケーションがほとんどとれない利用者とも関わることも想定でき、コミュニケーションが成立しないというケースも考えられる。また、「理解している」という表現についても、具体的に何ができていれば、「理解できている」という評価をしていいのか不明瞭であることも考えられる。しかしながら、低評価の場合、主に施設担当者がコメントとして、課題と思われる実習生の姿を書いてもらうことも可能であるので、根拠となる情報はルーブリックから追跡することは可能である。それと同時に、主に自分が関わる利用者（受け持ち利用者）との関係については実習ⅡやⅢで本格的に求められる内容でもあり、今後の指導として必要性は極めて高い。

4. おわりに

本稿は、本研究会がこれまで実施してきた介護実習でのルーブリックを用いて学生の自己評価や施設担当者の評価を照らし合わせながら議論をしてきた。従来の評価票の課題を検討するところから始まり、施設担当者の意見や視点等を直接聞き取りながら完成を目指してきた。当初は、施設担当者からも意義を見出すことが難しいことや、ルーブリックにすることで評価がしにくくなったと感じるなどの声も多かった。しかしながら、それぞれの領域、着眼点、指標を整理することで、学生は「何が求められているのか」が明確になるだけでなく、施設担当者も「実習生のどこを見ればいいのか」という評価者の視線の方向性のようなものは、以前と比べて明確になったのは間違いないと思われる。学生の評価と施設担当者の評価が類似する項目（高い評価も低い評価も）については、学生にとっては自信を持って良いと考えられると同時に自分自身の課題として認識できるものである。今では実習生を評価する施設担当者も本ルーブリックに慣れてきたこともあり、学生の実習の様子や評価の根拠など、より具体的な指導が可能になっている。

ただ、80項目近い指標は評価する側にとっては大きな負担であるだけでなく、「思い出せない」や「観ることができなかった」と考えられる指標については評点がつけにくい。また、意図していないと考えられるものの留学生へのまなざしは日本人学生と比較された上での評点がつけられる可能性もはらんでいる。

本研究会としての活動は、本年度で一つの区切りとなるものの、介護実習は引き続き実施される。今後も施設の関係者と協働しながらルーブリックの改善に努めることやそれを活用した養成校でのより一層の指導や支援につなげることが今後の課題である。

付記

本研究は科学研究費補助金事業「基盤研究C」（課題番号 JP19K02261、研究代表者：鷺尾敦）の助成を受けて行った研究成果の一部である。また、ルーブリック作成に関してこれまで多くの時間を割いていただいた、各介護福祉施設関係者の皆様に御礼申し上げます。

参考文献

- ・中央教育審議会（2012）「新たな未来を築きための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」
- ・中央教育審議会（2018）「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」
- ・藤浦五月（2021）「初年次レポート・ライティングプログラムにおけるルーブリックの改善」、『武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所』5号、pp. 125-146.
- ・福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦（2019）、「介護実習でのルーブリック評価の導入による効果

- と課題」、『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第5号、pp. 28-39.
- ・福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦 (2018) 「介護実習におけるルーブリック評価導入に向けての課題—一次週施設へのアンケート調査から—」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第4号、pp. 35-46.
 - ・柘崎京子、松永 美輝恵、宮本佳子、楠永敏恵。吉賀成子 (2018) 「介護実習の実習目標達成を支援するための取り組みと課題：「実習課題ルーブリック」の作成と活用結果から」『介護福祉学』25巻1号、pp. 1-10.
 - ・松本なるみ、高畑裕子 (2021) 「保育士養成校における施設実習の学びに関する一考察—施設実習評価のためのルーブリック作成に向けて—」、『東京家政大学教員養成教育推進室年報』11巻、pp. 97-104.
 - ・松下佳代 (2012) 「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—」『京都大学高等教育研究』18巻、p. 75-114.
 - ・三木知子 (2018) 「ルーブリックによる教育・保育実習自己評価スタンダードの提案」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』12巻1号、pp. 1-10.
 - ・宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子、柘崎京子 (2017) 「初学習段階における「介護実習記録」を課題とするルーブリック評価の施策と活用」『帝京科学大学紀要』Vol. 13、pp. 77-86.
 - ・岡山加奈、荻あや子、高林範子、山口三重子、萩野哲也 (2014) 「既存の基礎看護学実習評価表の課題とルーブリックを用いた評価表の提案」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』第21巻1号、pp. 9-16.
 - ・大森真、沼田世里、上田敦子、矢嶋敬紘 (2021)、「共通シラバス英語科目に於ける質保証と学習支援への取り組み (2) : 英語プレゼンテーションに於ける「流暢さ」と「発音、韻律」の評価に関するルーブリックの提示と学修者の意識への影響」、『茨城大学全学教育機構論集 大学教育研究』第4号、pp. 1-19
 - ・Stevens, Dannelle D. and Levi, Antonia J., (2013), *Introducing to Rubric: An Assessment Tool to Save Grading Times, Convey Effective Feedback, and Promote Students Learning* . Stylus Publishing (=佐藤浩章監訳、井上敏憲、保野秀典訳 (2016) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部)
 - ・鷺尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章 (2020)、「介護実習ルーブリック評価結果を用いた学生の実習分析」、『高田短期大学紀要』、第38号、pp. 23-34.
 - ・鷺尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章 (2021) 「ルーブリック評価から得た介護実習における学生の成長分析の志向」、『高田短期大学紀要』、第39号、pp. 13-24.